減量から、新たな人生の獲得へ

患者が次に必要としていることは何か、そしてそれを提供するのは誰か

重要ポイント

減量はゴールではありません。体重の維持、身体的な変化、そして心理的な適応こそが、患者のニーズにおける真の課題なのです。

GLP-1受容体作動薬の服用を中止した患者の多くは、1〜2ヶ月以内に体重が元に戻ったと報告しており、これは減薬プロトコルに重大な課題があることを示唆しています。

皮膚のたるみやボディラインの改善に関するニーズについては、医療チームではなくソーシャルメディアを通じて情報収集や対応が行われています。

体重の再増加への恐怖は、最も一貫して見られる心理的な懸念であり、その要因は空腹感と同様に、「食べ物から解放された静かな心(mental quiet)」の喪失にも大きく起因しています。

減量後のニーズに応えるためには、多職種連携によるケア、期待値の設定、業界横断的な連携、そして適応型インテリジェンスという4つの柱からなるエコシステムが必要です。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

本調査について

本レポートは、GLP-1受容体作動薬、肥満手術、あるいはその両方を用いて減量を経験した、米国在住の36歳から71歳までの成人8名を対象とした、定性デプスインタビューに基づいています。参加者はインタビュー時点で20～80ポンドの減量に成功しており、減量開始からの経過期間は、現在治療中の方から介入後2年以上経過した方まで多岐にわたりました。すべての参加者は、ボディコントゥアリング手術を受けたか、あるいは現在その手術を真剣に検討している状況にありました。

議論では、身体的な変化、代謝の現状、心理的な適応、医療ケアとの関わりなど、減量後の生活のあらゆる側面が取り上げられました。本定性調査は、有病率を定量化するのではなく、テーマを浮き彫りにし、仮説を導き出すことを目的としており、調査結果はより大規模な定量調査を通じて検証される必要があります。

参加者は全員女性であったため、本調査の結果は、減量後の課題に関する男性の体験を反映していない可能性があります。

さらに、本調査は、消費者への医薬品情報提供が許可されており、GLP-1受容体作動薬の遠隔医療による処方 が広く行われている米国で実施されましたが、特定された患者の根本的なニーズは、市場を問わず関連性があると考えられます。規制の枠組みや医療制度が異なる地域の読者の皆様は、これらの知見を現地の状況に合わせて適応させる必要があります。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

「ゴール」という思い込み

何世代にもわたり、社会も医療業界も、減量を究極のゴールとして扱ってきました。

これまでの通説は単純明快でした。余分な体重を落とせば、持続的な健康は自然とついてくるというものです。しかし、多くの患者にとって、目標体重に到達することは旅の終わりではありません。それは、はるかに複雑で、しばしば予期せぬ新たな章の始まりなのです。

GLP-1(グルカゴン様ペプチド-1)受容体作動薬の普及が加速し、低侵襲の肥満手術も普及したことで、過去最多の人々にとって急速な減量が現実のものとなりました。しかし、こうした患者層が拡大するにつれ、ケアにおける明らかなギャップが浮き彫りになっています。それは、減量後の生活における身体的、精神的、感情的な現実に対して、患者が常に十分な準備ができていないという点です。GLP-1受容体作動薬を使用していた患者、高度な肥満手術を受けた患者、あるいはその両方を受けた患者との対話を通じて、一貫したパターンが浮かび上がりました。それは、初期の成功に続いて、誰も十分に備えさせてくれなかった課題に直面するというものです。

肥満治療のパラダイムは根本的に変化しました。もはや単に「どうすれば体重を減らせるか」という課題を解決するだけでは不十分であり、体重が減少した後に現れる、患者のニーズという複雑な新たな課題にも対処しなければなりません。

真の「ゴール」とは、目標体重に到達することではありません。それは、減量よりも体重維持の方が困難であること、誰も警告してくれなかったような体の変化があること、そして新しい自分として生きていくための心理的な取り組みがまだ始まったばかりであることを患者が気づき、介入が終了する瞬間なのです。この道のりを明らかにすることで、多くの患者が切実に必要としているにもかかわらず、業界がまだ提供できていない、統合的かつ継続的な支援を設計するための、極めて重要でありながら未開拓の機会が見えてきます。

目標体重に到達することは、旅の終わりではありません。それは、はるかに複雑で、しばしば予期せぬ新たな章の始まりなのです。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

想像していなかった身体: 身体的現実

体重計の数字が語る物語と、身体が語る物語は異なります。著しい減量に成功した患者にとって、「減量後」の身体的現実は、彼らが想像していたものとは大きくかけ離れています。医療システムは、体重計の数字を称賛したものの、この新たな現実と向き合うことを、ほとんど患者自身に任せてしまっています。この段階を特徴づけるのは、相互に関連した3つの課題です。これら3つが相まって、単なる患者教育の改善にとどまらず、減量後のケアの再設計が必要であるという主張を裏付けています。

課題1: 代謝の維持: リバウンドとその他の課題

体重の戻りは強力な生物学的反射であるため、治療後の計画は治療そのものと同じくらい重要です。しかし、体重維持には画一的なアプローチは通用しません。業界は、減量への道のりが体重維持の戦略を決定づけることを認識し、2つの異なる患者集団間のギャップを埋める必要があります。

GLP-1受容体作動薬の服用を中止した患者(自らの選択、費用、あるいは保険適用外のいずれかの理由で)のうち、私たちが話を伺った多くの方が、服薬中に身につけた食事や運動といった行動の変化を維持していたにもかかわらず、1～2ヶ月以内に顕著な体重の増加を報告しました。GLP-1受容体作動薬による食欲抑制や代謝への影響は、患者(あるいは医療提供者)が十分に認識している以上に、大きな役割を果たしているのです。多くの人にとって、薬物療法によるサポートがなくなると、意志の力や習慣だけでは太刀打ちできないほどの強い空腹感が戻ってきます。私たちの調査に参加した患者たちは、服薬中は体が「食べる量を減らす」ように訓練されていたと感じていたものの、服薬を中止すると、突然、混乱を招くほどの食欲の急増を経験したと述べていました。ある患者は次のように表現しました。「体はすでに食べる量を減らすように訓練されていて、それで大丈夫だったんです。そして、すべてが奪われてしまった今、もっと空腹になり、『明日になれば良くなるかもしれない』と自分に言い聞かせ続けているのです」と語りました。しかし、実際に良くなることはめったにありませんでした。

製薬会社や遠隔医療プラットフォームにとって、この動態は臨床的な責任を意味します。そして、これに効果的に対処できる企業にとっては、特に米国のような市場において、GLP-1受容体作動薬の遠隔医療による処方が急速に拡大している状況下で、患者の定着率を高める潜在的な機会となります。体系的な減薬プロトコル、行動コーチングプログラム、柔軟な投与ガイダンスこそが、この患者層が待ち望んでいる製品の拡張機能なのです。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

インタビューに応じた術後の患者たちは、異なるものの、同様に厳しい現実に直面していると報告しました。肥満手術は栄養素の吸収を変化させるため、ビタミン値やタンパク質摂取量のモニタリング、定期的な血液検査が必要となります。しかし、これらのプロトコルへの順守状況は一貫していません。患者たちは、自分が何をすべきかは分かっているものの、仕事や育児、経済的なプレッシャーといった競合する要求の中で、治療計画を維持するのに苦労していると語りました。「生活が邪魔をした」という表現が繰り返し登場しましたが、それは言い訳としてではなく、それを支えるシステムが存在しない中で、維持管理に何が必要かを率直に述べたものでした。

医療従事者や栄養・サプリメントブランドにとって、代謝維持期は未開拓の市場であるように思われます。つまり、自身のニーズを理解し、それを満たす意欲はあるものの、術後の吸収動態に特化した製品が不足している患者たちです。

課題2: たるんだ皮膚: 美容上の願望と臨床上のニーズ

急激な体重減少により、インタビューに応じた患者たちは皮膚のたるみを抱えることになり、身体的な不快感や、自身の体型に対する深刻な苦痛を抱えていました。私たちの調査によると、患者には通常、皮膚のたるみが生じる可能性について警告されていますが、その警告が真の意味での心の準備につながっていることはほとんどないことが明らかになりました。患者たちは、そのような事態が起こり得ることは知っていたものの、実際にどのような見た目になるのか、あるいはそれを抱えて毎日生活することがどのような感覚なのかを具体的にイメージすることができなかったと述べていました。

特に敏感な懸念として浮上したのが、顔の変化でした。衣服で隠すことのできる腹部や腕の皮膚とは異なり、顔のたるみは社交の場や写真、そして鏡の中で目立ってしまいます。患者たちは、実年齢よりも老けて見えると感じており、誰も事前に警告してくれなかった予期せぬ感情的な代償が生じていると語りました。

ある患者がこう表現しました。「自分の顔が自分を裏切っているような気がした。」顔以外で最も頻繁に挙げられた問題箇所は腕と腹部で、患者たちは上腕の皮膚を「コウモリの翼」といった俗語で表現していました。これらの患者たちは、こうした変化をただ受動的に受け入れているわけではありません。腹部用コルセットを着用したり、コラーゲンサプリメントを試したり、特定の部位を鍛えるウェイトトレーニングに取り組んだり、肌の弾力性を謳うスキンケア製品を調べたりと、積極的に対処法を見出そうとしています。

「特に顔の皮膚がたるんでしまい、老けて見えるようになりました。そのせいで、実年齢より少し老けて見えたのです。体調は良くなり、快適で、動きも軽やかになりました。しかし、顔だけは、ある意味で私を裏切っているような気がしました。」

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

たるんだ皮膚は、常に美容上の問題や見栄の問題として捉えられがちですが、一部の患者にとっては、減量の成果を台無しにしてしまう、日々の身体的・心理的な負担でもあります。皮膚の健康を臨床上の優先課題として再定義し、この問題に対処するための製品やプロトコルを開発する医療提供者やCPG(消費財)ブランドは、市場がまだ真剣に受け止めていないニーズに応えることになるでしょう。

課題3: ボディコントゥアリング: ソーシャルメディアによって導かれる医療上の意思決定

インタビューに応じた患者の中には、著しい減量後に矯正処置を検討する人が増えていますが、彼らは医療チームの指導を受けていないのが現状です。ボディコントゥアリング(体の輪郭形成)に関する情報の入手経路は患者主導であり、ソーシャルメディアを通じて行われています。こうした患者たちは、体の形を整えることを目的とした医療的または美容的な処置を求めて、減量の相談に訪れますが、その期待は、適応、タイミング、合併症、回復期間などについて率直な臨床的な対話によるものではなく、ビフォーアフターの写真によって形作られているのです。

ボディコントゥアリングの選択肢は多岐にわたり、比較的軽度のニーズを持つ人を対象とした、メディカルスパなどで一般的に提供される非侵襲的な施術から、より集中的な外科的介入まで幅広く存在します。臨床的な指導がないため、患者はこれらの選択肢を自力で模索しなければなりません。例えば、通常は腹部や乳房を対象とするボディコントゥアリング施術を組み合わせた「ママ向け美容整形(mommy makeover)」と呼ばれる施術は、理想的な目標として位置づけられており、通常は大幅な減量後のより広範囲な身体的変化のために適用されるのが一般的です。費用は関心を持つ上での障壁にはなりませんが、施術を受ける上での障壁としては依然として残っています。特に、肥満手術を受けるために低コストの地域へ渡航した患者は、ボディコントゥアリングのためにも同様に渡航する意欲を示しており、この層がいかに意欲的であり、かつ十分な医療サービスを受けていないかを示しています。

患者が自ら来院するのを待つのではなく、減量後のケアの連続体の中で自らの位置づけを確立している形成外科医、皮膚科医、および医療美容ブランドは、意欲の高い患者層にリーチする上で有利な立場にあると考えられます。GLP-1受容体作動薬と、適格なボディコントゥアリング施術者への紹介ルートを組み合わせた製薬会社や遠隔医療企業は、処方箋の提供にとどまらず、患者との関係をさらに深める機会を得ることができます。

「当初は追加の手術を受けたいとは考えていませんでしたが、美容整形に関するページをフォローするうちに、関心を持つようになりました。」

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

減らすことのできない体重:
心理的現実

医療システムは、減量中の患者を支援する方法は熟知しています。しかし、体重が落ちた後に続くすべてのことは、患者自身に委ねられています。減量後の心理的な道のりは、単なる短期間の適応期間ではなく、アイデンティティや人間関係を再構築し、リバウンドへの不安を管理していく、継続的で非線形なプロセスなのです。身体的な変化とは異なり、こうした課題は臨床ケアチームからはほとんど見えません。

アイデンティティの変化とボディイメージのゆがみ: 追いつかない自己認識

目標体重に到達したからといって、その道のりが終わったわけではありません。多くの患者にとって、減量に伴う心理的な取り組みは、臨床的な治療が終了したとみなされた時点から始まります。こうした患者たちは一貫して、以前の自分と今の自分とを折り合いをつけることの難しさを語っていました。体重が最も多かった頃の写真を見ると、多くの患者は誇りではなく、純粋な驚きを口にしました。これは、長年にわたって形成されてきた身体イメージが、減量によって簡単に消え去るものではないことを示唆しています。新しい身体に「馴染んでいく」というプロセスは徐々に進むものであり、多くの人にとって、決して完全に完了することはありません。患者は、ケアチームの誰もその対処法を教えてくれなかった、長期にわたる過渡期に留まり続けています。

服を着ているときは、とても自信が持てます。今は買い物に行くのも好きです。歩くのもずっと楽になりました。でも、服を脱いで自分の体を見ると・・・そこにはまだ少し悩みがあります。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

この乖離には、心理的な要因に加え、身体的な要因も重なっています。私たちの調査によると、主に薬物療法によって体重を減らした患者は、結果が「努力なしに」得られたと感じたため、運動量を減らしてしまうことがよくあります。数ヶ月後、彼らは痩せてはいるものの、身体的には衰弱していることに気づきました。ある患者は、「見た目は健康そうだけど、実際はそうじゃないんです。階段をたくさん登ると息が切れてしまいます。本来ならそうなるはずがないのに」と語りました。外見と身体能力のギャップは、単なる臨床上のリスクにとどまりません。これは、フィットネスブランドにとって、GLP-1受容体作動薬の使用者向けに、カロリー消費ではなく機能的な筋力と筋肉の維持に焦点を当てたプログラムを開発する市場機会でもあります。

より広義のブランドにとって、その意味するところは明らかです。「ビフォーアフター」を強調するマーケティングは、こうした患者が自身の変化をどのように体験しているかを見落としています。減量に成功した患者は、その旅を終えたわけではなく、新しく複雑なアイデンティティ形成のプロセスを歩んでいる最中なのです。その現実を認識したキャンペーンは、減量を「完結した物語」として扱うストーリーよりも、はるかに真摯に人々の心に響くことでしょう。

私の体への影響はかなり大きかったため、今でも身体イメージに関する問題を抱え続けています。

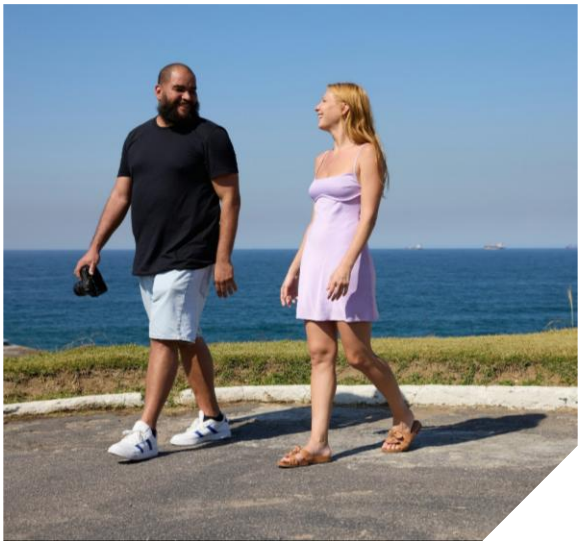
© Ipsos | 2026 | all rights reserved

人間関係: 社会的な関係性に生じる予想外の変化

患者を取り巻く人々は、多くの場合、患者が「変わった姿」を受け入れる準備ができておらず、医療制度もその現実に対処するための指針を提供していません。著しい減量に対する周囲の反応は、患者が予想していたよりも複雑で、一様に肯定的なものではありません。ある患者は、パートナーの反応が祝福ではなく傷ついたものだったと語りました。「太っていたあなたと出会ったんだ。あの頃のあなたに戻ってほしい。」子供を含む家族は、体重の変動を注視し、コメントを寄せましたが、一部の患者にとっては、それは支援というよりはプレッシャーとして感じられました。私たちの調査対象となった患者のうち、こうした関係性の変化に対処する方法について、臨床的または心理的な指導を受けた人は一人もいませんでした。患者は、人間関係における余波を完全に自分一人で処理せざるを得なかったのです。

この空白を埋めるため、患者たちは同様の道のりを歩んできた人々からのピアサポートに目を向けました。それは、医療システムが提供し得たどのような支援よりもはるかに価値のあるものであることが判明しました。患者たちは、臨床現場でのやり取りではめったに得られない現実的な励ましや期待値の設定を、オンラインコミュニティが提供してくれたと評価していました。これは、この分野において患者の信頼がどこに築かれているかを如実に示すものです。減量後の感情的なニーズに臨床システムが確実に対応できるよう、既知のサポートネットワークや専門の心理士を紹介することは、クリニック、病院、薬局で提供されるケアを補完する、包括的なケアにつながるでしょう。

患者と関わる製薬会社やヘルスケア企業、そして消費者にアプローチするウェルネスブランドや消費財(CPG)ブランドにとって、この事実は極めて重要な意味を持ちます。ピア・ツー・ピアの支援は、単なる付加的なサービスではありません。それは、医療システムが提供しないガイダンスを求めて、患者が頼る主要な手段なのです。こうしたコミュニティ体験を体系化し、促進する企業は、処方箋だけでは得られない、患者からの深いロイヤルティを獲得することになるでしょう。



© Ipsos | 2026 | all rights reserved

リバウンドへの恐怖：消えることのない不安

インタビュー全体を通じて、リバウンドへの恐怖は最も一貫して見られた心理的な懸念であり、介入の種類にかかわらず存在し、現在減量を維持している患者の間でも持続していました。この恐怖は実際の経験に基づいています。GLP-1受容体作動薬の投与量を減らしたり中止したりしたインタビュー対象患者の何人かは、食事や運動を継続して努力したにもかかわらず、1～2ヶ月以内に体重が戻ったと報告しました。ある患者は目標体重に到達し、医師の提案に従って投与量を減らそうとしたところ、すぐに体重が戻ってしまうのを目の当たりにしました。「減量のために、ここ数ヶ月もの間、時間とお金を費やしてきたんです」と彼女は語りました。「また太りたくありません。そうでなければ、これだけの努力をした意味がどこにあるのでしょうか？」彼女は、正式な長期計画は立てていないものの、無期限に薬の服用を続けるつもりです。

この心理的負担は、絶え間ない警戒心として現れます。患者たちは、体重計の数値の変動について考え込み、体重増加の兆候が見られるやいなや運動を強化し、先回りして食事を制限していると語りました。こうした反応は、対処しなければ不適応な行動となるリスクがあります。しかし、より興味深い発見は、体重が戻るという恐怖が、そもそもなぜこれらの患者が薬を重視しているのかについて明らかにしている点です。

ある患者は、薬の価値を主に、「食べ物に執着したり、常に食べ物のことを考えたりする」ことから解放してくれる点にあると指摘しました。この患者や、私たちの調査に参加した他の何人かの患者にとって、GLP-1受容体作動薬は食欲を抑制するだけでなく、食べ物への過度なこだわり—広く「フードノイズ」として知られるようになったもの—という精神的負担から解放をもたらしているのです。これは依存の力学を再定義するものです。なぜなら、これらの患者は単に身体的に薬に依存しているだけでなく、薬がもたらす「静けさ」に心理的に依存しているからです。その「静けさ」が奪われると、苦痛は空腹感だけでなく、かつて安らぎを見出していた精神状態が再び戻ってくることにも起因するのです。

行動健康プラットフォームやウェルネスブランドにとって、これは減量後の領域において最も見過ごされているインサイトです。GLP-1受容体作動薬が提供してきた認知的・感情的なサポートを、行動コーチング、マインドフルネス・プログラム、あるいはコミュニティによる相互監視ツールを通じて提供する企業こそが、患者が服薬中止を恐れる真の理由に対処することになるでしょう。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

体重管理の変革：初期のイノベーションから学ぶ

前述した患者の経験は、介入後のケアをより適切に支援する体制へと移行しつつあるシステムの中で生じている課題を示しています。

米国市場における最近の進展から得られる重要な教訓は、さまざまな業界で体重管理に携わる幅広い市場関係者だけでなく、患者や医師にとっても有益となるでしょう。体重管理そのものの構造を検証し、これらの革新から学ぶことで、業界は根本的な課題に取り組み、将来の解決策が単なる症状ではなく、根本的な原因に焦点を当てることを確実にすることができます。

体重管理そのものの構造を検証し、これらの革新から学ぶことで、業界は根本的な課題に取り組むことができます。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

アフターを構築する:
減量後のエコシステムの4つの柱

肥満治療において、薬の処方や手術はもはや最終段階ではなく、あくまできっかけに過ぎません。先に指摘した課題を解消するには、患者の全治療過程を視野に入れた統合的な枠組みとして、以下の4つの柱にわたる協調的な取り組みが必要です:

1 多職種連携ケアモデルのさらなる進化

持続可能な体重管理は、単一の医療提供者だけでは実現できません。このケアモデルには、この患者層がすでに自主的に求めている専門分野を含む、高度に統合された多職種チームが必要です。

- 代謝のリバウンドや筋肉量の維持に取り組む、登録栄養士およびフィットネス専門家
- アイデンティティの調整、リバウンドへの不安、およびGLP-1受容体作動薬による「フードノイズ(食事への執着)」の心理的緩和を支援するメンタルヘルス専門家
- 外見に関するさらなる懸念に対処するための、資格を持つ形成外科医および皮膚科医への紹介

私たちの調査でインタビューした患者の中には、すでに独自に、あるいはソーシャルメディアやオンラインコミュニティを通じて、こうした専門医を探している方もいらっしゃいます。ケアチームに早い段階で彼らを巻き込むことで、患者が非現実的な期待を抱く前に、正確なガイダンスを受けられるようにするのです。

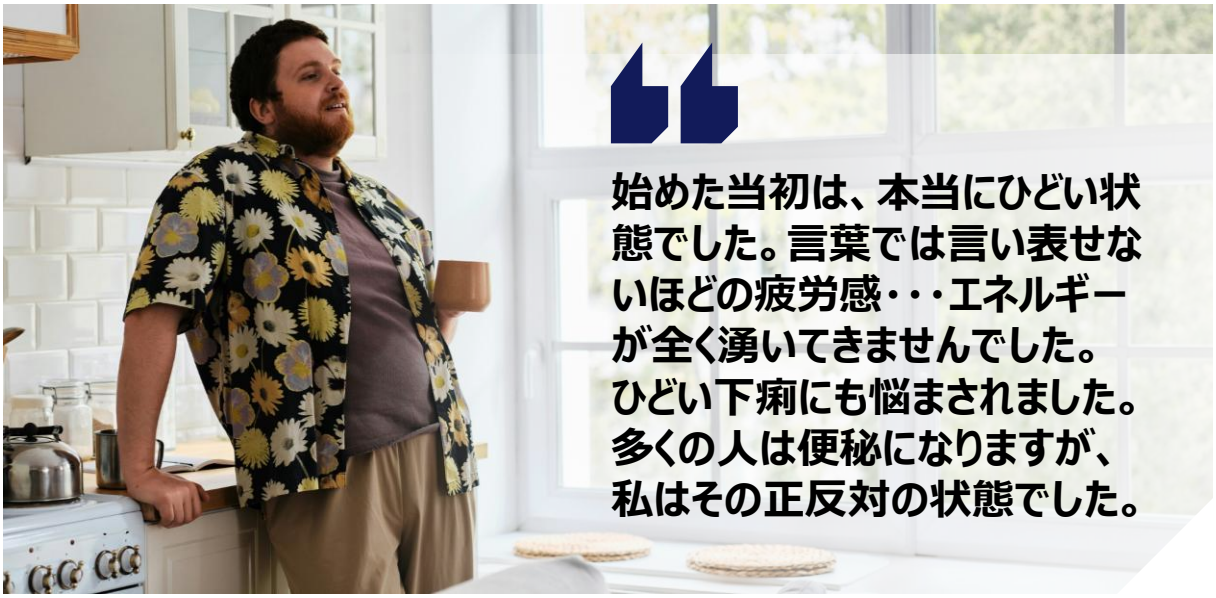
> **そのことについて話し合える相手、お互いに責任を共有し合える相手がいること—それが私にとって常に助けになりました。**

*心理評価の要件は市場によって大きく異なります。米国では通常、肥満手術に際して精神科的評価が義務付けられていますが、他の地域では要件が異なります。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

2 期待値の設定を臨床基準に

多くの患者が感じる失望は、減量そのものに対するものではなく、期待と現実とのギャップによるものです。医療提供者やブランドは、患者の治療過程において、できれば治療法の選択肢が提示される段階で、このギャップを積極的に埋める必要があります。皮膚のたるみが生じる可能性、代謝維持の現実、心理的な適応の複雑さ、そして社会的関係の変化について率直に話し合うことは、患者体験における単なるオプションの付加要素ではなく、治療の道のりの最初から、治療の順守、継続、そしてブランドへの信頼やロイヤルティを促す長期的な基盤となるものです。



3 業界横断的な連携

このエコシステムの構築は、診療現場の枠をはるかに超えたものであり、ヘルスケア企業、消費者向けブランド、デジタルウェルネスプラットフォームの積極的な参加が必要です。業界間の交差点には、大きな機会が潜んでいるようです。製薬会社がGLP-1受容体作動薬の処方と行動コーチングアプリをセットで提供する場合であれ、栄養ブランドが術後の吸収障害に対応したサプリメントを開発する場合であれ、長期的な成果を維持するためには、減量後のケアの基準を定義する上で、協業によるイノベーションが鍵となります。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

4 適応型の市場インテリジェンス

体重管理を取り巻く環境は、決して固定的なものではありません。次世代の医薬品、新しい手術技術、そして先進的なウェルネス製品が、かつてないスピードで市場に投入されるにつれ、患者の体験や期待も必然的にそれに伴って変化していくでしょう。こうしたトレンドをリアルタイムで把握し続けることが極めて重要です。医療提供者やブランドは、機敏さを保ち、ケアにおける新たな課題や、新たに浮上する消費者のニーズを継続的に特定し続けなければなりません。今日、革新的であるソリューションや製品も、明日には方向転換する準備が必要であり、長期的な存在意義と患者の成功のためには、継続的な市場インテリジェンスの収集が不可欠です。最終的には、患者を包括的な支援と継続的なイノベーションのエコシステムで包み込み、絶え間ない市場の変化に先んじることで、「ゴール」という思い込みを払拭し、一人ひとりが新たな現実の中で活き活きと生きられるよう支援することができます。

これら4つの柱が一体となって、現行のシステムでは行き詰まっている患者に寄り添うケアモデルを形成し、これらの先駆的なブランドを、体重管理の次世代を牽引する主要なプレイヤーとして位置づけるのです。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

イプソスの強み:
体重管理の新たなフロンティアを切り拓く

本調査の対象となった患者たちは、単に新たな製品を求めているわけではありません。彼らは、継続的な道のりを歩む「一人の人間」として見てもらいたいと願っているのです。これは、体重管理分野で事業を展開するブランドにとっての「成功」の定義を再定義するものです。減量の次の時代をリードする立場にあるのは、体重が落ちた後に訪れる、患者にとって最も重要な瞬間を理解している企業です。

イプソスでは、ヘルスケア分野における深い専門知識と確固たる消費者データを活用し、クライアントがこの複雑な状況を自信を持って乗り切れるよう支援いたします。当社は、ヘルスケアおよびウェルネスに注力する企業と提携し、以下の取り組みを行っています:

患者のジャーニー全体を可視化: 体重計の数値にとどまらず、減量後に生じる身体的・心理的な未充足ニーズを明らかにし、貴社のブランドが信頼を得て介入できる機会を正確に特定します。

患者の現実に基づいた革新的なソリューションの開発: 除脂肪筋肉量を維持するための栄養製品を開発する消費者向けブランド、肌の弾力性を高めるための専門スキンケア製品を設計するウェルネス企業、あるいは長期的な維持プログラムを構築する医療提供者など、どのような企業であっても、それらの製品やサービスを真に意義あるものにするために必要な患者インサイトをご提供いたします。

業界横断的なパートナーシップの特定: データに基づくインサイトを活用し、高付加価値の提携先を特定できるよう支援し、貴社のブランドを一段と高める相乗効果の機会を明らかにします。

長期的な患者との関係とブランドロイヤリティの構築: 「アフターケア」の段階に投資するブランドは、深い信頼を築きます。当社は、単なる取引相手から、患者の継続的な健康を支える生涯のパートナーへと進化するために必要な知見を提供します。

これらのインサイトが貴社の戦略にどのように活かせるかを探るには、イプソスチームまでお問い合わせください。イプソスチームにご連絡いただければ、これらのインサイトを行動に移し、患者様が「減量」から「新たな人生」へと移行できるよう、どのように支援できるかをご提案いたします。

© Ipsos | 2026 | all rights reserved

2026年6月

減量から、新たな人生の獲得へ

患者が次に必要としていることは何か、そしてそれを提供するのは誰か

執筆者:

Chareen Lim
Senior Vice President
Healthcare (US)
Chareen.Lim@Ipsos.com

Sofia Halgren
Engagement Manager
Healthcare (US)
Sofia.Halgren@Ipsos.com

Rebecca Cohen
Senior Consultant
Healthcare (US)
Rebecca.Cohen@Ipsos.com

Pelin Tozan
Consultant
Healthcare (US)
Pelin.Tozan@Ipsos.com

イプソスヘルスケアについて

世界30か国以上に拠点を構えるグローバルに連携したチームとして、ヘルスケア製品のライフサイクル全般にわたるインサイト、エビデンス、ガイダンスを提供しています。私たちは、クライアントが商業的な成功と、最も重要なことである「**患者の生活の向上**」とを両立できるよう支援しています。

詳細はこちらをご覧ください:
www.Ipsos.com